

# 村落における文字文化への離陸と子ども

——手習教訓書の成立とその背景——

高橋 敏

- はじめに
- 一 村落社会と教育
  - 二 村落文字文化
  - 三 文字文化への離陸と村落  
おわりに

## 論文要旨

子どもと文字文化の関連性については、従来からプラスの評価がなされるのが通例であった。しかし、無文字文化を基調とする村落社会に埋没していた子どもが文字文化の習得に向うに際しては、すべてがこの動きを肯定したわけではなく、激しいリアクションが加えられていた。換言するなら、文字文化は強力な無文字文化の抵抗に耐えて村落社会へ定着していったのである。この教育・文化の変動を伝える史料は少ない。

小論で紹介した「イロハ異見」や「世話字往来」は、村落社会にあって文字文化を子どもに学ばせることを使命と考えた幕末期の百姓文人、手習師匠が遺した稀少な文献である。手習師匠から見た村落社会における子どもの生々しい

姿が映されている。

彼らは全面的文字文化の肯定の上に、文字文化の学習を推進したのではなく、その前提としてヒトが人間になるための社会共同の教育が必要不可欠であることを充分に承知していた。また、すでに始まっていた親の子どもへの偏った愛情のあらわれを批判し、子どもの成長にとって村共同の敵しい対応を求めている。そこには、自生的に応況に展開し始めた文字文化に対する強い警戒心が認められるのである。

文字文化の展開を前に、自己制御の機能を失いつつある現在の状況を見るにつけ、村落社会における文字文化の離陸の実態を考える意味もあろう。

## はじめに

民衆が初めて文字文化に接し、これを習得しようとするとき、どのようなリアクションがあるのか、長く興味を抱いてきた問題であり、また疑問であった。

例えば近世村落において文字文化が不可欠となり、私的な存在から公的に必要なものとして学習されることになったとき、そこにどのような状況が展開していたのか。

文字文化は正の文化であり、文化水準や発展段階を示す絶対的指標（メルクマール）であるという考え方が既成の先入観となって支配的である。果たしてそうなのか。文字文化が高度に進んだ現代文明の状況は、いたるところでその弊害が指摘されていることも事実である。

地球的規模でいうなら、文字文化の現状と未来は複雑であり、混迷の中にありとみなしてもよい。

この小論は、民衆の文字化、民衆の文字文化への離陸に際してこの文化運動を推進した人々の動向について、二、三考察を試みたものである。とりあえず、近世村落における文字文化を考える上で、(一)村落社会と教育 (二)村落と文字文化 (三)文字文化への離陸と村落の三点について簡単に述べておかねばならない。

そして次に、具体的事例として上野国勢多郡原之郷村（現富士見村原之郷）とこの村で文字文化の教育に熱心に取り組んだ船津伝次平の行動

から文化・教育の大変革期に起こった村落の社会変動を垣間見てみたい。

## 一 村落社会と教育

近世村落が成立するためには広義の意味で教育領域は不可欠である。村落構成員を構成員たらしめるためには、生まれてくる赤子を子育てし、一人前の成人とするための教育の機能がなくてはならなかった。

近世村落はもとより村人である農民で構成される。この意味で農民の家連合とも考えられる。しかし、家が存在するためには、家の利害を越えて農業生産を保障する村として共同性が醸成したのである。山川海原等の共同利用や錯相した権益等の慣行を守り、村としての生活を続けていくためには、構成員の養成がなくてはならなかった。いわば無文字文化、無文字の教育というべきもので従来日本民俗学が主として扱ってきた分野である。ヒトの誕生から始まり子ども、若者とつづく村の教育であり、家もかわるが主として村共同体の意向が強く反映している。子どもの産育・教育権の観点からみるなら、親（家）に優先して村の共同性がものをいうと考えるとよい。子どもは、村落内に埋もれており、伝統的習俗の内部にいた。

しかし、幕藩制村落にあっては支配のために文字文化は不可欠であり、支配の末端にいた名主等の村役人は文字文化習得者でなくてはならなかった。

## 二 村落と文字文化

近世村落の生活にあって農業その他諸産業の発展は村人の生活に變動をもたらし、また多様化していく。中世来のさまざまな制約を負っていた家は、分家や下人等隷属農民の自立によって小農を生み出していく。石高制下の村落の本来の年貢負担者たる百姓が広汎に生まれ、名実ともに村落は家連合の様相を呈するに至る。

中世以来の土豪百姓として村役人職を世襲し、文字文化を独占して来た村落支配層に対し、小農が自らの利害を守るために文字文化の習得が必要になって来る。領主にとっても文字文化の普及は支配の円滑を図ることにもなり、決して反対はしておらず、むしろ奨励している。

ここに小農の家の成立、家永統の願いを実現するための後継者としての子どもの教育が問題となり、變動する村落社会を生き抜くための文字文化の学習が村落全体の話題となった。

## 三 文字文化への陸離と村落

小農の家の子どもに対する文字の教育の要求の広汎な成立は手習塾の爆発的誕生となる。しかし、ここには、村落に内在する村落の教育とのかかわりがなくてはならない。文字文化の学習によって引き起こされる變動に影響を受ける旧来からの生活文化様式を守ってきた村人との間に

軋轢が生ずる。単的にいうなら文字文化と無文字文化の相剋であり、共存のための模索でもあった。

村落に文字文化が定着していく時期の動向を示す史料は少ない。目下の状況では、特定村落での実証的アプローチが求められているといえよう。

本稿は、フィールドを上州赤城山麓の一村落到定め、そこに展開した動きを、二、三の史料から考察することを目的としている。取り上げる村落の状況、時代的背景については、拙著『近世村落生活文化史序説―上野国原之郷村の研究』（一九九〇年 未来社）を参照していただきたい。

### (一) 幕末村落の状況

原之郷村の幕末期の状況は村の指導者船津伝次平のチヨボクレに明らかである。文字文化をマスターし、実学としての農学書まで著作する百姓文人から見た村の現実は次のようであった（慶応四年「雑記第壹号」船津恒平氏所蔵史料）。

皆さん聞きなよ、当国疲弊の起こりと申へ、老も子供も踊か御好ミ、何右御好て、やれくこまった、風俗頽れて止処か無そや、（中略）家業も打捨、偶畑けの手入ニ出ても、鍬柄打やら、口三味線やら、己の仕事ハ棚におし上、（中略）何の彼のとて正しき者迄めつたに勧めて外道ニ引込ミ、生娘杯に無益の稽古を無体ニさせたり、踊の不好な聲や息子にいろく理屈た、踊ニコぬと入用雑費ハ一倍

出させ、掃除をさせたり、茶番をさせたり、後日になってはつき合  
 なしたと理屈を立掛(中略)いわれて余儀なく踊って大ニはつして、  
 其又はつミニ女房か出るやら、亭主か出るやら入やら出やら、婿も  
 なしたよ、踊々と男も女も本性失ひ、実ニ気がふれ、御上の御触や  
 名主の下知抔決而構うな、我等の楽しむ邪魔なす斗りた、此節抔に  
 道の普請や堤の破損や新堀川除目論見、名主か有ったらのかすな、  
 石塔持込め、井戸には大便、娘は強姦、苗場に稗種(中略)踊の故  
 障を致したうらみた抔と詈る、此等に恐れて手習師匠も素読の師匠  
 も脇にふ立、見たやうにそっくり置故、弥図にのり(後略)

養蚕・生糸業の興隆がもたらす村落の変動、娯楽を求める村人たち、  
 狂気の沙汰の地芝居、この背後に暗躍する若者集団。まさに無文字文化  
 を担う年齢集団の威力が村落を圧倒している。地芝居に非協力なものに  
 は、石塔を持ち込んだり、苗場に稗種を播いたりする蛮行を敢えて実行す  
 る。しかも、このような無知蒙昧な野蛮に対し、文字文化の担い手であ  
 るべき手習師匠も素読の師匠も拱手傍観している。伝次平に言わせれば、  
 憂うべき状態以外の何ものでもなかったのであろう。

既に原之郷村ではこのような若者集団をバックにした祭礼の強制に対  
 し、これを批判する動きもあった。次の二点の文書「口上」はこの間の  
 動向を伝えてくれる(原之郷区有文書)。

口上

一、当春踊等出来候ニ付、人数惣しぼり、惣懸り、半懸り等はなん  
 中ニ御座候ニ付、此段右踊たき物ニ而致、懸り等其物ニ而致候様偏

ニ奉希上候

村役元衆中様

正月九日

小前

百姓

口上

一、当春踊等出来候ニ付、人数惣しぼり、惣懸り、半懸り等はなん  
 中ニ御座候ニ付、此段右之踊たき拾四五人ニ而致、懸り等其物ニ而  
 致候様、若懸り等不踊物ニ懸候様ならば、踊等相つぶし可被下候  
 以上

正月十日

名主伝次平様

小百姓

人数惣しぼり、惣懸りという祭礼に全員を参加させ、参加・不参加を  
 問わず費用の分担を強制する動きに、参加者のみの負担とし、それが出  
 来ないなら、祭礼を取り止めることを要求する勢力が村内にあったこと  
 を示している。これを無文字文化と文字文化の相剋と見做してもよいの  
 ではなからうか。

(一) 「手習初学教示之書」と「伊呂波異見」

こうした状況下の村落にあって文字文化の習得、手習いの必要性を説  
 いた船津伝次平は文久三(一八六三)年十一月、「手習初学教示之書」と  
 「伊呂波異見」を提示した(いずれも船津恒平氏所蔵史料)。前者は子ども  
 も(筆子)に対してよりは師匠に向けてのものであろう。後者は子ども

とその背後にいる親に向けられたものである。

手習初学教示之書

一、手習道場参候時者父母に対して礼をのへ、又帰り候時も同然たるへし、稽古所へ入り師匠に向ひ手をつき、唯今参り候と可申上、若宿にて用事等ありて遅参致し候節も、其旨断申上へし、夫より相弟子へ一礼をいたし、其上<sub>ニ</sub>而机を直すへし、平生の詞遣ひも叮嚀にして稽古所定法之通堅く相守、手習道具之外者持参仕間鋪事、硯箱、文庫等取みたさず奇麗に取仕舞、出入等は駈走らず、惣而神妙に可心懸者也、教訓状如件

文久三癸亥十一月

伊呂波異見

いつれ 子供よ きゝたまへ  
ろくに手習せぬ人は  
はちをかく事おほいそよ  
にけかくれして わるたくみ  
ほめられてみる心なく  
へらす口のみたゝきつゝ  
とかく仕舞へ 口こたへ  
ちひさき者といとみあひ  
りこうらしけに いひつのり  
ぬすみかくして こゝろまゝ

るすになる日をうかゝひつ  
をとりさわいて いたつらに

わか儘そたち 不行儀に

かいた清書の見くるしき

よるひるしらぬあほうもの

たかこゑしては ならみあひ

れいきさほふも よそく<sub>ニ</sub>に

そしりうけしも はぢとせず

つくく<sub>ニ</sub>おもへ 身のほとを

ねん中つかふ紙や筆

なにから何まで 気を付て

らちなしことは せぬかよい

むたなあそひに 日を暮し

うちへかへりの遅ければ

あたり立たり 親はまつ

のちに下山の 其時は

おほえた事は 更になし

くらうをしても 今のうち

やますに せいをいだしなは

まつにん間の かひかある

けい古ことにも よしとあし  
ふえや太鼓やさみつどみ

こうたしやうるり 碁や将棋

えよう栄華は皆ふため

てならひ 読物 専一そ

あさは日の出ぬ先におき

さきによみにし書をふくし

きみに忠義をつくすのは

ゆめにも わすれたまふまし

めぐり ちよほ一 ちやうはんは

みらいみしめをみる元手

し匠は人の子なれとも

ゑ顔見せずし しかるのは

ひつきやう子等か為なるそ

ものことよかれまるかれよ

せけんは色々人さまく

すくれてかしこき此道は

京も田舎も 皆いろは文字

よみかきは、師から親から、しつけから、習ふ子供の心さしから

ここで一貫して強調されているのは、文字文化に離陸するに当たっての

覚悟である。型としての厳格さがまず求められてやまない。

師に対する礼儀、手習所での挨拶はじめ礼式、文字文化を媒介する文

房具に対する厳しくやさしい取り扱い等心構えが神妙に教訓として述べ

られている。

そしてイロハの順にわかりやすい教訓が語られていく。彼岸にある文字文化に対し此岸にある子どもは修業を積み、ということになる。

しかし、文字文化に向かって離陸する際の覚悟を平易に伝えようとす  
る意図は読み取れるが、イロハの語呂合せに苦吟したせいも、ひとつ鮮  
明さを欠くきらいがある。

### (三) 「世話字往来」

船津伝次平も、「伊呂波異見」に満足しなかったのであろう。三年後  
の慶応二(一八六六)年「世話字往来」(船津恒平氏所蔵史料)を著作  
して村落における子どもの教育と文字文化へ向けての覚悟を率直に提起  
した。

#### 世話字往来

あつさ弓春雨にみつのあまりの一日を得て、残篇野史とりちらせる  
が中に、わらへらがもてあそへる世話往来と題せるものあり、こは  
いつの頃、いつれの人の作りけんものとしもしらね、抒よく幼童教  
諭のゆゑよしを究さり、しかはあれ、抒も世に久うして伝写の誤叱  
すくなからず、されは童蒙に惑ひを伝ふるのおそれ見捨かたく、拙  
き筆をとりていさゝか訂し補ふ事かくなん、尚後人益わか志をとき  
て、正斧を加へたひてんかすと、希むかため、此一言を添て序とす  
るのミ

慶応二丙寅年正月

船津冬扇識

夫人間と 生れては

いとけなきより年上と

目上の教受て見よ

左のみ格別むつかしき

事にはあらず其たとへ

大木になる松とても

若木の時に枝に手を

いれおくときはかたちよく

年を経るともかはるまし

扱子供等も 父母の

おしへたまへる事毎を

決して背かず慎みて

朝は旭のてぬ先におき

手水をつかひ眼を覚し

膳に居りて礼をのへ

喰終るまで余処をみす

菜のよしあしすぎきらひ

不塩梅なる料理ても

喰物小言申すまし

年八歳になるなれば

忽にせず 手習の

稽古始むる其仕様

真直に机居ておき

硯に水をすこしいれ

すみの順逆こゝろ得て

まからぬ様に持てすり

淡か濃か すみのいろ

よく試て 筆をそめ

臂をうかめて 氣をしつめ

手本に向ひ文字毎の

其相応をよく見分

筆の運ひのうきしつみ

心を配りやすらかに

一を引にも 油断なく

字毎／＼を合点して

手本の様にかくうへは

人にすくれて氣も広し

扱算題盤も 習ふへし

士農工商面々の

家業の道を 第一と

勤むる内にひまあらは

学問素読 躰方

詩歌連俳碁将棋や

柔術剣術弓角力

茶の湯生花謡舞

皷小鼓笛太皷

万の芸を嗜むとも

必夫にはまりこみ

家業疎略にいたすなよ

宗祇法師の発句にも

けに誠なれ芸か身を

たすくる程の 不仕合

姓より人はそたちそと

いふはまことのよきおしへ

心に覚はひめおきて

しりてもしらぬ風そよき

まして我より上々の

人のなす事

問ふは当座の恥なれよ

とはさるときは末代の

恥としるべきものそかし

猶又客に應對の

無礼籠相に注意して

敷居畳に躓かす

足音たてす立まはり

戸障子襖明閉は

静にいたす程そよき

出入の度を大人敷

咳も嚏も低うして

言葉静にたかふらす

兄弟朋友それ／＼に

信義をつくしつゝしみて

一家親類他人まで

貴賤男女の隔なく

老たる人を敬ふは

出世の道のつとめなり

浮世の中の親こゝろ

可愛／＼と子をそたて

我侂なりにおく故に

終にはそれか仇となり

無用の事に金銀を

湯水のやうに遣ひすて

紙や筆とに事をかき

片言葉にて友まねき

不問語に 差出口

非を見る毎にときならへ

知らぬ事までしつた態

過つ時は 負おしみ

非を理にせんと憤り

たち居振舞にくらしさ

よけて通せは其先の

火入灰吹煙草盆

烟管茶碗を蹴ちらかし

破れたる科を人に当

筆とる度か戸柱や

壁に人形をかきならへ

手本の読は忘れかち

口先のみに日をおくり

いやがられつゝわるあそひ

用いふ度に影かくし

呼立らるゝその時は

腹か痛むといつはりて

好きな事には夜を更し

常は宵にも伸ひ欠

居眠りながら素読して

虚言は上手にいひおほへ

隠れしカトルのんて友さそひ

骨牌オッペン樗母一奇偶や

福引過て小博突に  
変る心の曇りより

狐唄り／＼とはした銭

掠めて買うて喰ふ品ハ

串芋田楽餅団子

煮売蒟蒻油揚

箸はありても撮みくひ

湯茶沢山に啜りのみ

使に遣れは出先より

犬や狐を追ひあるき

河中野原かけめくり

衣服は泥にみたれ髪

親の異見も余跡になり

月日に年にかさぬれば

天の咎を 蒙るそ

早くこゝろを改めて

実体者となりたまへ

泣り／＼と人並に

元服仕たる計りにて

智恵の出ぬこそ恥ならめ

磨かぬ玉はひかりなし

磨けは人のたましひも

神や仏にならふらむ  
先人間と生れては

五六才よりこゝろつき

あしきによろすよきにより

よきにならふてつとめなハ

終には磨きなしうへし

よし世の中のよき人は

おのれ独にとまらず

子孫益々繁栄し

富貴自在の疑ひは

あらざる者と承知して

学ふ人こそ樂しけれ

人間となるための教育の不可欠なこと。そのための家の教育、そして不可避となった文字文化の習得、それに拮抗して大切な無文字の型の教育等が、発展段階に合せ述べられていく。家永統の教育、いわば後継者を育成するという目的が内包されているともいえよう。幕末村落の状況は「家親類他人まで」「貴賤男女の隔なく」「出世の道のつとめなり」と子どもに対し説かれるような開かれたものでもあったのである。そしてこの背景にある「浮世の中の親こゝろ」の問題点を指摘した。

小農家族によって発見された子ども、子どもへ読み書き字問を、という親の教育要求こそが村落における文字文化の浸透・定着の原動力であった。しかし、そこには大変な落とし穴があった。文字の習得には、従来の生活に密着した無文字文化との決別がつきまとう。無能力な状態で生まれた赤子が一人前の人間になるためには、新たな社会変動にともな

う文化様式としての文字を獲得することが必要不可欠としても、ひきかえに従来毅然とあった無文字の生活文化を否定することはできないのである。文字文化へ向って離陸するにはそれなりの覚悟と自己防衛がなくはならない。この意味で船津伝次平のこの「世話字往来」は、幕末村落社会に生きたリーダーが後世に向けて発信した教訓書ともいえる。

## おわりに

近世村落に起こった文字文化の発生、浸透・定着の社会現象は、旧来の村落の教育・文化にそれなりのインパクトを与えた。この変革期とも呼ぶべき状況を文字文化の受容と積極的利用に向けて離陸するにあたって、学習する民衆の立場からアプローチが行われた。その一具体例が老農船津伝次平が遺した、前に掲げた教訓書である。一三〇年余の歳月を越えて現代社会の教育・文化の状況に今なお通用するものを感じる。船津伝次平の警告は今日なお有効であろう。

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

## Take-off towards the Literate Culture in Villages and Children

TAKAHASHI Satoshi

Hitherto, the relation between children and the literate culture has on the whole been evaluated positively. However, when children who were sunk in the village society which was based on illiterate culture, started to learn the literate culture, it was not the case that every action affirmed this tendency; strong reactions took place. In other words, the literate culture took root in village societies by overcoming the strong resistance of the illiterate culture. Few historical documents remains to tell us of such educational and cultural changes. "*I-ro-ha Iken*", or A Different View on (old) Japanese alphabet, and "*Sewaji Ōrai*", or Text of Ordinary Characters, described in my paper are examples of such rare bibliography, written at the end of the Tokugawa regime (the Edo Period) by a literary farmer and a teacher of penmanship, who considered it their mission to teach the literate culture to the children in the village society. These documents reflect vividly the life of children in village society, as seen by the penmanship teachers.

They did not promote the teaching of the literate culture on a full-scale affirmation of the literate culture, but they were fully aware that community education to change *homo sapiens* into men was necessary and indispensable. They also criticized the favoritism shown by parents toward their children that was apparent in those days, and demanded a strict response by the village community with regard to the growth of the children. There can be seen here a strong distrust of the literate culture which had begun to expand spontaneously and extensively.

When looking at the contemporary situation where the function of self-control is being gradually lost in the force of the development of the literate culture, the author considers that it is probably worthwhile to examine the real situation with regard to the take-off towards the literate culture in village societies.